

「五人男并団十郎せりふ尽」(河竹黙阿弥による序文)

近頃本屋の見世へ立並べし本を一覧なすに十に八九は活
版摺り明治年間の新書のみ己文化の旧弊に木板摺りの古本
を好めば如何なる良書も西洋紙とインキの匂ひに好もしからず茲に
同感の染谷翁は若き時より古書を集め一本といふ珍書の
多きに彼芥子屋が泪を翻せば又達摩屋も弘子を投しすこぶる
一個の蔵書家なりしが遂に好める道より古本屋を初められ蚤と
り眼で所々をあるき虱本と本屋がいふ近松叟の古浄瑠理やかゆひ
所へ手の届く脚色細かき柳亭翁が正本製の古版を尋ね好者へ
鬻を業となせり此頃享保に名高き五人男のせりふを初め古きつら

(展示箇所 ここから)

ねやせりふを集めし一小冊へ序文を頼まれ否と言れぬ齒なし
仲間安受合に受合しが七人男と七人女のせりふの助作を言立に
其俣ずるけて仕舞置しもきのふ厳しく雷の落たる如き催促うけ庄
九郎のしやうことなしに筆は採れ共安もなく所謂平氣の平兵衛
人の知恵をば雁金やその文七の拙き文は極印打て頼み人も千右衛門の
先刻承知布袋の腹に実がなければなんでも早いが市右衛門と
序文に替し言訳も五人男の名によそへ長せりふに書にこそ

明治廿二年六月中旬

古河黙阿弥記黙阿弥

(展示箇所 ここまで)